

はしがき

本書の成り立ち——「差異の繋争点」とは

本書は、立命館大学グローバルCOEプログラム『『生存学』創成拠点——障老病異と共に暮らす世界の創造』によって行なわれている、大学院生やPD(ポストドクトラルフェロー)などへの研究活動支援の1つである院生プロジェクト、「地域社会におけるマイノリティの生活／実践の動態と政策的介入の力学に関する社会学研究」の活動がもとになっている——「生存学」創成拠点については拠点のホームページ(<http://www.arsvi.com/>)を、研究プロジェクトについては(このプロジェクトを教員・院生らがともに推進・展開する研究会である)「マイノリティ研究会」のホームページ(<http://www.arsvi.com/o/m02.htm>)を参照されたい——。2009年6月より始まった同プロジェクトは、2012年1月現在まで継続されている。すでに2010年11月には、山本崇記・高橋慎一編『『異なり』の力学——マイノリティをめぐる研究と方法の実践的課題』(生存学研究センター報告14、立命館大学生存学研究センター発行)を中間的な成果報告として公刊している。この報告書をさらに大きく「発展」させようと試みたのが本書である。執筆者は、多様な背景を持ちながら、各々の事情で「生存学」創成拠点の周辺に集った者たちによって構成されている。

この研究プロジェクトが発足した際、各自の問題意識は漠然と共有されていただけであった。報告書の作成においては、極度に漂白された当事者性と実践性の「幸福な共存」のなかにある「生存学」創成拠点に対して批判的・自覚的であることを目して、社会調査と研究のあり方を問うた。本書においても第Ⅲ部のなかでその問いは再審されている。だが一方で、各論文において、その点は必ずしも自覚的なものとはなりきれていないという課題がある。それは、自己反省や再帰性といった社会学・社会科学における調査・研究法に具備されている装置と意識的に距離を取ろうとしているからではない。学的

な問いと枠組みに執着しているからである。その剔抉の作業の始まりは、おそらく、このグローバルCOEプログラムの終わりにようやくやってくると思われる。本書がその区切りとなるだろう。

本書は、「論文集」ではない。『「異なり」の力学』においても、その点は強く意識され、共同調査(熊本・北九州)、研究合宿(生野・東九条)、定例研究会の継続と、可能な範囲のことを実施した。しかし、それでもなお、各個の論文を共約するということは非常に難儀な作業となり、互いの論文が参照し合うような報告書にはならなかった。その反省を踏まえて、2011年に入り集中的な研究会を繰り返してきた。その過程で、互いの問題意識と執筆内容の確認作業を行ない、各自の特徴を出しながら、共著としての統一感を出すための模索を行なった。

そして、内容を体現する主題として選択したのは「差異の繫争点」である。差別や排除をめぐる多くの著作が公刊されるなかにあつて、それらに「批判的な立ち位置」にあろうとした本書は、差異が排除を伴った社会的差別へと転形していく様——時間、場所、空間で生じているもの——を捉えることに重きを置いた。それは、差異をめぐる「マイノリティ」「マジョリティ」、「加害者」「被害者」、「当事者」「非当事者」といったかたちで振り分けられ、また、振り分けようとする力と仕組みに焦点を当て、差別を問う「人と社会の繋がりと争いのあり方」を明らかにしたいという問題設定があつた。

本書の問題意識——社会(科)学へのいらだち

少なからず、本書で共有されているのは、従来の差別・マイノリティ研究の傾向を、ミクロで微細な差別／被差別(意識)の発生過程・相互行為過程に照射しようとする方法論と位置づけ、そこから距離を取り、マイノリティ間の分岐や錯綜、集団形成や抵抗を規定する制度・政策と歴史的背景の診断を行なおうとした点にある。本書で扱っている時代は、1950年代、1970年代、そして現代にまたがり、戦後といわれる時代を横断している。これらの時期を対象にする学的領域を社会学とするのか、歴史学とするのか。そのような問いは意味をなさないであろう。社会学が歴史に接近することは歓迎すべきことである。歴史の実証性から絶えず不満を突きつけられることが避け

られないとしても。一方、社会学からすれば、歴史学が「マイノリティ」を取り上げる仕方は、尽くされた感のある並列的かつ浅薄な記述に墮しており、魅力は弱い。

その意味で、本書には貫かれた視点がある。第Ⅰ部の有蘭、西沢、北村論文は戦後史・現代史のなかにおいて病と身体をめぐる社会運動の生成過程に焦点を当てたものといえる。本書の中心課題である歴史診断と制度分析を交差させた点が特徴である。第Ⅱ部の高橋、堀江、村上論文は、現代における当事者・運動間にある分岐や錯綜に焦点を当て、社会運動の潜在的可能性を探っている。第Ⅲ部の大野論文、山本論文は国家とその域外にある社会運動・集団形成に照準し、森下、小泉論文は社会科学の社会調査に潜む問題点を指摘し、実践性の観点から別の可能性を拓く方途を探っている。

制度・政策という点に関していえば、社会政策学に役割を見出そうとする近年の社会学とは、福祉国家と社会民主主義のバリエーションを論じる——社会政策史として第一次世界大戦以降の歴史が参照されもするし、社会学の誕生とも深いかわりを持っている——ことに終始し、「反貧困」を掲げる社会運動や政権交代を掲げる(ていた)政党と軌を一にしている。そのうえで、国家が語られ、社会が論じられ、しかも、盛んに論じられることは、痛々しさを超えて、いらだちすら感じる。大小のスコープを行き来し、問題から問題へと渡り歩く社会に憑依した学問のいかかわしき。内部にはリフレクシブという装置すら備わっている。それこそが社会(科)学の厄介なところでもある。融通無碍であることの長所が短所となり続けているその鎖状を断たなければならぬだろう。

この点に自覚的であろうとした本書は、「差異の繋争点」と名づけられ、多様な差異(化)のなかで、人と集団が繋がり、争う複線化した過程や力学を捉えようとした。その方法論的視点が制度と歴史にある。あまたある排除論・差別論や批判的言説にどれほどの問題提起ができているかは、読者の批判を待たなければならない。だが、「差異の繋争点」という「造語」でもって描かんとする世界は了解していただけるのではないだろうか。